

竹生島 - 天照大神
嚴島 - 市杵島姫

5,769^P

竹生島も
⑤5779^P

菊池郡史 288^P
熊本の山 ①7-98^P

古京の弁天山、大池・小池

肥後国の西合志村大字野々島には、^{弁天山}弁天山と呼はれる小さな孤立丘がある。

弁天山（一四六^フ）は、起伏の極めて少ない広大な合志原の台地上に、緑濃い円錐形状の美しい姿をまわだたせている可憐な山である。

この弁天山の中腹には、弁財天堂および奥の院があつて、里老の説に、

「弁財天の所在は、嚴島（伊都岐島）、竹生島、江の島、そしてこの西合志の野々島など、日本中に七島があり、是は其のうちの一つである」

という。（「菊池郡誌」名著出版、二八八頁。「熊本の山」今江正知、熊本日日新聞社、九

八頁参照）

天照大神・三女神の故郷ともいうべき古

京に、をしのんで、いつの頃か（まだ完

全に忘れ去られていない時）誰かが、こ

の小山に弁財天を祭ったのであろう、と想像さ

■この弁天山を基突として、西方の五
ところには合志塚と呼ばれる小丘、西北方一
時のところには石川山と呼ばれる小丘があっ
て、これら三つの小丘が、古京の西の
京域（と思われ所）に、三角形状に突
在する様子は、ほほえましく可愛らし
い風情がある。（第13回参照）

尚、昔、これら小三山の山頂から、合志
台地一帯に広がる城柵や、宮城内等が、一望
のもとに見渡せたことであつたろうか。

とすれば、一般庶人がこら小丘に登るこ
とは、固く禁いられていたようにも思われる

*

5763²1/2 16行
奥只中

5773 6行 と合わぬ

5,771^P

新和(1) 225^P 下末
同又(1) 273^P 1/2

「とこそで」 5738^P 1/3
5800^P

ところ、古京の宮城門（朱雀門に相当す
る門）のやや北方寄り、大池、小池と
呼ばれる池があつたようである。現在の西合
志村大池あたりに、大小二つの池があつたと
いう。（第12・13図参照）
大池、小池について、こう言ひ伝え
られてゐる。
「西合志村大池にあり。今日大池は形跡を
存するも小池は地名を残すのみ」聖徳太子当
国に五ヶ所の池を穿ち給ひし一なりといふ
（「菊池郡誌」名著出版、三七七頁参照）
言ひ換えれば、
「聖徳太子は、肥後国内五ヶ所を穿つて池
とされた。そのうちの一ヶ所が西合志村大池
あたりの大池・小池である」
という事なのであう。
その小池では、聖徳太子は何故、古京の宮城門
の内側、一、一、つまり宮城の真只中と思わ
れる所に大小二つの池を穿たれたのだろう

H9.8.13 (水)
H6.5.29 (木) ⑥

H17.9.23 (金) ⑥
213-1/2

新刊 226 P 上
H1.10.14 (木) ⑥

213-1/1

5,772 P

213-1/2

か。

したう、

へ

聖徳太子は、

肥後国合志の地にか

つて存

在した邪馬台国の都の宮城の地下遺構を徹底

的に破壊する為

大・小の穴を穿たれた。

その穴に水が溜って、池になった。

と、いうことなのかも知れない。

そして

へ聖徳太子が穿たれたという

肥後国の他の

四ヶ所の池のところに

都へ古の都もしくは重要な建造物

が存在したのではなからうか

と想像される。

地下遺構を壊す為だけならば土

を掘り返すだけでよい。

へ大きな穴を穿ち、あるいは更により広

いを取りかこむ堤を築き、この中に水を注ぎ

入れて池となし、木竹紙等を腐らせよう

と企図されたようにも思われる。

(*)

つちくち
土塊 1490'

紀上80'

5,773P

なだらか 1660'

5771' 16行と合「上」
せる。

5757P
5803P

さて、肥後国合志の台地は、ただただ平坦なように見えるが、それでもわおかばかりの起伏がある。

大池・小池、朱雀門の内側に位置している。のであらうか、を挟んで、宮城西方の京域内には弁天山（一四六）・合志塚・石川山の三小丘があり、京城南端やや東よりには群山（一四五）・飯高山の二小丘がある。（第12）

13 図参照

こから五つの小丘は、なだらかな合志台地のの上に、まるで矛の鋒からしたたり落ちて凝り固まったかのようにポツン、ポツン、ポツンと海形よく点在して、古来、人々に愛されてきたようである。

次のような古老の話がある。

「昔、有明海を埋めようとした大男が、天秤棒で土を運んでいったが、あまりの重さに尻もちをついた。二つのざらから落ちた土塊が弁天山、群山になり、ふちからこぼれたおま

5769' 5行
起伏の極めて少なるなだらかな台地

H29(2017)11.15(9)~18(7回)
 H30(2018)11.30(12)~11.30(2回)
 令和元(2019)11.21(木)~11.25(4回)
 H9.8.13(木)
 令和2(2020)7.12(火)~7.14(4回)

5,774^P

⑤ 5487^P
 5488^{P-1/2}

変成岩 72004^P 大池 小池
 原文に「小池」はない
 H12.1.8 ⑤ 追加
 した。

1/4 F 7/13
 7/13

けが合志場、飯高山などになった。そして、
 尻もちのあとが大池・小池になった。
 というのである。
 ーかし、山の組成は違っていて、弁天山は
 (第十九十五章へ小野貞樹の項で述べた木葉
 山と同じく) 変成岩であり、一方、群
 山は白亜紀の貝化石を包含する堆積岩でできて
 いる。へ「熊本の山」今江正知、熊本日新
 聞社、九八頁参照)

*

七福神

見れでは、さしに、七福神について考え
てみることにしよう。

日本では古来、七福神をめでたい福徳
の神としてあかめ敬つてきた。

七福神とは、言うまでもなく大黒
天・弁財天・毘沙門天・恵比須・布袋・福祿

寿・寿老人の七柱の福徳の神のことである。
通説によると七福神は、中国の八竹林

の七賢などにちなって、インド・中国・日
本の雑多な福徳の神をとりあもななく七

体とりあわせたものであろうといわれてい
る。因に述べる、

七福神のうち、大黒天・毘沙門天（多
聞天）は仏法を守護するインドの神、弁財天

（妙音天）は音楽や弁才などをつかさどるイ
ンドの女神であり、いずれも福徳施与の神とし

て、平安時代頃から信仰されるようになった
。なお、よく知られているように大黒天は

大国主命と習合され、弁財天は天照大神・三

大黒・弁財
毘沙門天
えびす様
ふくろう・寿老人

あかめ敬う元17P
百利13-291
元986P
天寿老人1334

竹林七賢元1425P
百利13-291
七福神天寿老人

元1079P
施与はと215322
元弁才天の異称

天照大神 4944馬

5,727^P - 1/2

習合 202859

なるほど、そういう一面はあろう。
しかし、本地垂迹説が盛んであったこの当
時、ただたんに七という聖数に合わせ
て、雑多きわまりない神や人を無造作に選んで
れだけで人々が満足し得たとは想像しにくい。
・大黒天を大國主命、弁財天を天照大神（三
女神）と習合したように、他の五福神につい
ても、日本の著名な者との習合を行なったので
はなからうまいか、と思われぬ。
↑↑↑現在、縁起物として、宝船に七福神を
配した絵や、置物などが喜ばれている（第564回参照）
これは、七福神が船遊びをして、情景であ
ろうか。それとも、海を渡ってやってきたと
ころを示しているのであらうか。
↑↑↑そうした詳細については分からないが、ある
いは船に乗り、大倭国（九州）から大和国
（畿内）へやってきた七柱の神達を、七福
神と重ね合わせ、考えたのかも知れない。
↑↑↑七柱の神達と七福神とかどのような組み合わせ
せであつたのか、本当にそんな組み合わせ方が行
なわれたのかどうか等、いうまでもなく定か
でないが、参考迄に、——組み合わせ

5,777P-2/2

・右頁上粉ヒ、
大きくはみ出し
掲載下さい。



・著作権許諾は
不要だと思っ
ます

1409 第564図 七福神宝船 鈴木春信 宝暦11~12年(1761~62)頃 横大判紅摺絵 29.8×42.0cm

改行 1200

・「ながきよのとをのねぶりのみなめざめなみのりふいねのをとのよきかな」の回文歌が、書き添えられている。(広辞苑<宝船>)

大宅 とも

399
小林 とも

大己貴命 273P 紀上565P
大己貴命 紀上125P

H.I. 171 (田) 紀上130P 記(理)75P

大己貴命 1185P

5778P-1/5

太いゴ4

たら妥当なのではなからうか、と思われるところを述べてみたい。

米

大黒天

大黒天

大黒天は、大己貴命と習合され、

大黒天

と大己貴命という音の一致から、極めて容易に結

びついたのであろう。

大黒様

つまり大己貴命は、円形で低く側

面のふく水出た形の頭巾をかぶり、左肩に大

きな袋を背負い、右手に打出の小槌を持ち、二

つの米俵を踏まえる姿で表わされることが多い。

なお、

光り輝く神

大己貴神の幸魂奇魂は、海を渡ってや、

てきた

第333

海を光りて、孝かひ来る神

のであつたが、記紀の不明確な書き方の故に

大己貴命と大己貴命が混同されたのであろう。

例えは、神代紀上第八段一書第六には、

大己貴命と大己貴神、亦の名は大物主神、亦は国作

とある。

そこで、いっしか、

5,778^{P-2}/₅

紀上130^b

「^{おほくにぬしのおほかみ}大国主命（つまり大黒天）は、海を渡つて来られた」と語られるようになったのかも知らない。

＊

↑↑↑↑非常に興味深いことがある。

神代紀上第八段一書第六には、

「^{おほかみ}大己貴神の幸魂奇魂は、日本国の三諸山

三輪山に居られた」と記されているが、

三輪山に、^{おほかみ}大神神社

か国で最も古いという^{おほくにぬしのおほかみ}「^{おほくにぬしのおほかみ}大国主大神木像」が

安置されている。

「^{はすは}蓮葉大黒天像」^{はすは}蓮葉台座上に立つ木彫

玉眼。台座とも高き一尺六寸

という大黒天像がそれであり、今日よく目に

する大黒天像とは少々趣を異にしてゐる。

ほぼ円錐形の帽子をかぶり、やや厳しいお

顔を以ておりでなる。（⁸²⁵写真参照）

なお従来、この像は鎌倉時代に作られたの

ううと考えられていたが、⁸²⁵調査の

5.778^v-3/5

h/v (次頁の写真を採用する)



大國主大神木像

*

結果、像内部の空洞の形状や、釘などからみて
 平安時代に作られた最も古い大黒天像であることが分かった。
 (「大神神社」中山和敬、学生社、二二頁。平成八年十一月十六日テレビニュース参照)

洞の
 内部

・頁の上段
右粉に
掲載
したい。
・明3<17
おいて下す。

~~2,779^p = 7/8 同写真~~
5,778 - 4/5



(像高 68.8 cm)

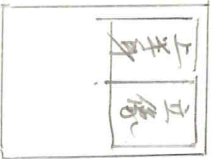
1409

写真図版 825 大國主大神木像 (奈良県大神神社所蔵)

おおみく

1309 出雲大社展 出雲歴史博物館 平成25年4月発行 134、253頁参照

・頁の上段
左半分に、
掲載した。



・暗くならない
ようにしてさ。

5, 778^p - 5/5



404

1484

『全国一の密めく』学習研究社 2004年1月15日発行 115頁参照

(上半身)

1484

「黒帽子を被り、左肩から背に袋を担ぎ、左手でその先を握り、右手は腰の位置に構える。袴を着け、袴をはき、月燈を大きく見せ、右足をやや前に踏み出した形で岩座に立。

つ大國主大神像、眉を(かめた)忿怒の顔である。ほぼ全体が一木で造られている。
・平安時代(12世紀)の作。

5,779^P

天の41 地名^P
1034

⑦ 5775^P 末 ~ 5776^P

元禄 2003¹
百利 28-19¹

へ 弁財天^{へんさいてん} へ 等参照^{とうさんしょう}
前^{まへ}の金華山^{きんわさん}など 祭^{まつり}ら小^こて^ている。 (「云辞苑」
江^えの島^{しま}・大和^{やまと}の天^{てん}の川^{かわ} (吉野郡^{よしのぐん}天川村^{てんがわむら})・陸^{りく}
同^{どう}さ^され、近^{おち}江^えの竹生島^{たけなま}・安芸^{あき}の最^も島^{しま}・相模^{さかみ}の
■ 弁財天^{へんさいてん}は、天照大神^{あまてらすおほみかみ}・三女神^{さんよしん}・吉祥天^{きちぎょうてん}と混^ま
さ^され、通常^{つうじょう}、琵琶^{びわ}を弾^ひずる姿^{すがた}であらわされ
弁財天^{へんさいてん} 寿^{いず}・除災^{じゆさい}・戦勝^{せんしょう}を得^えさせる天女^{てんじよ}と
延^{えん} 弁財天^{へんさいてん}は、音楽^{おんがく}・弁才^{へんさい}・福智^{ふくち}・延^{えん}

林 208¹
福^{ふく}

42362^P

捧付 元 882^P

天つき
改行

改行

5,780^P

恩沙門天 多門天王
 1864P 1400P
 百升 25-416P

太いゴ4

ろうか ✓
と想像される。

次夜子所

毘沙門天（多聞天）
 天の三者のみ、曰天^{（天）}と
 いう字が添えられて
 いて、注目される。
 もーかいたら、大黒天（^{（大黒）}大国主命）や弁財
 天（^{（天照）}天照大神・三女神）だけでなく、
 毘沙門天もまた、日本神話中に見られる尊貴
 な神と習合され、一体視されていたのではな
 ろうか。

毘沙門天（多聞天）
 四天王の一。十二天の一。身体は黄金色、
 怒の相の武神形で、甲冑を着け、片手に宝
 棒を捧げ、片手に鉢、または宝棒を持つ。須弥
 山の北面に住し、北方世界を守護する神と
 される。（「広辞苑」ハ毘沙門）ハ多聞天。
 「世界大百科事典」平凡社ハ毘沙門（参照）
 あるいは、まったくのあてずっぽうなから
 ハ毘沙門天（多聞天王）は、^{（天）}天^{（天）}（^{（天）}天^{（天）}）
 田天皇（^{（天）}天^{（天）}）と習合されたのではな
 か

5.781^P

・なお、応神即位前紀に、こう記されている。
「其の名を稱へて、^{ほむたのすめらみこと}與田天皇と謂す。上古
の時の俗、^{たもん}鞆を號ひて、^{たもん}鞆とは、よく似た音の響き
を持っていゝといえよう。

・つまり、^{あまのあしほ}毘沙門天が、日本神話中の月読尊
(天忍穂耳尊、人皇として記載の場合は応
神天皇)に相当すると考えられたとして、
おかしくはない。また、阿蘇山を須弥山に比して考えるとき

数代続いた応神天皇は、
・阿蘇山北方の筑紫国宇彌(及び筑紫国蚊田
で誕生され、

・阿蘇山の北北東にあたる宇佐国で東の国(拘
奴国)と長年対峙され、
・辛卯年(三三一)には、市杵島姫を奉じて

海北の三韓を制覇され、その後、東の国
(拘奴国)を打ち破って近畿・中国地方を統
合された、
と言えよう。(既述)

spile 5782 2003

地名 761 信貴山
日本社寺 660

5,782

5787
いふ
いふ
5787

地名 1298

更に、阿蘇山北方の英彦山（古くは日子山
に作る）には、官幣中社英彦山神社があつて
あまのおしほみのみこと
天忍穂耳尊・伊奘諾尊・伊奘冉尊を合祀して
いるという。（「帝国地名辞典」太田為三郎
名著出版へ彦山へ参照）
こういふことを考え合はせるとき、
へ須弥山の北面に住し、北方世界を守護す
る武神、毘沙門天（多聞天王）として最もふ
さわしいのは、
月読命（天忍穂耳尊）
（底神天皇）であらう。

と思はれる。

↑↑↑大和国生駒郡平群村の信貴山には
国宝信貴山縁起で有名な朝護孫子寺（略して
孫子寺といひ、毘沙門堂、信貴山と俗稱する）
があり、竹節分の夜には鬼追いの行事が催され
る。

「あはれる赤・青の鬼を毘沙門天が退治し
まきちうてん」
大吉祥天女（弁財天と混同され）が福豆を
まく

という話にちなんで豆まきが行なわれるのだと
いう。（「日本社寺大観」名著刊行会、寺院

H9.8.15(金)
H6.6.4(土)⊕
→

5.783^P

Spile 5783^P H/V

Spile 5783^P

編へ朝護孫子寺

「朝日新聞」昭和六十一年

一月三十日付へ節分(参考)

●応神天皇が三韓を征討され、市杵島姫(大)

吉祥天女)が人々を慰撫された故事を示すも

のであううか。

●なお、法隆寺でも節分の夜には鬼追いが行

なわれて、黒・赤・青鬼が毘沙門天の法力で

調伏されるという。へ「朝日新聞」昭和六十

一年一月三十日付へ節分(参考)

■また、毘沙門天の身体は黄金色であるとい

うのだから、必然的に、月の色と結びつ

けて考えられたのだらうと推察される。

米

948^P
-1/2 5.784^P

紀上96^P 1225 949^P 紀上94^P
557^P 1223 紀上95^P 紀上92^P

魚網 (漁網と書く) 太いゴ4

● 恵比須 (夷) 一般には、次のように解釈されている。
味する通称であった。また漁村では、海底の
石をひろい、あるいは魚網の中に入った漂流
物などを持ち帰り、夷と称して祭つて、漁
の守護神としてたという。(「世界大百科事
典」平凡社)。「玄辞苑」へえびす(参照)
● 記紀には、よく知られているように、
阿波岐原に到つて、磯敷され、海の底に藤がれ
たとき、底津綿津見の神・底箇え男の命が、
中に藤がれたとき、中津綿津見の神・中箇え
男の命が、水の上に藤がれたとき、上津綿津
見の神・上箇え男の命がお生まれになつた
と記されている。
● 博多漁をはさんで、北の方・志賀島に綿津
見三神が祭られ、南の方・那珂川のほとりに
住吉三神が鎮祭されている。
● そして先に述べたように、海神の「わたし
は、朝鮮語の Pata (海) からきているのである

太伯の経
④5788°-1/2 東夷広1559°

5,785°

元ひす神 市科③-560°左下

と推察される。

(*)

ろうという。(第十二章気長足姫尊へ佐吉三
神・綿津見三神の項において既述)
●とす小ば、綿津見三神・佐吉三神の出生に
まつれる一連の語は、朝鮮半島から渡来した
と考えられよう。
●こうしたわけで、
朝鮮半島から渡来した綿津見三神・佐
吉三神は、異民族を意味する日夷と
言葉と強く結びついて、日夷比須神と
呼ばれるようになったのかも知れない。
なお、中国人は、古来、
へ中華(黄河の中・下流地方)の東方に住
満州・朝鮮・日本などの民族を指して、
日夷(東方のえびす)と呼んでいた。
という。へ「広辞苑」へ東夷(参照)
その呼び方に従って、
へ朝鮮半島から渡来した綿津見三神・佐
吉三神は、これを、日夷比須神と称したの
と推察される。

要ルビ確認

りよう
俚謡 元 2323[?]

大カン 1613[?]
ほころ

七浦¹ 祠
5749^{改訂}

5,786^P

七浦の図

天のき
改訂

■ それではここに、
三神・住吉三神^{すみよし}とが同一視^{どうりつ}されてい^る一例^{いちれい}

をあげてみよう。

・厳島神社がある安芸の宮島の俚謡に、

安芸の宮島^{あきのみやじま}廻^{まわ}れば七里

七里七浦七恵比須^{えびす}

とうたわわ^{とらわ}てい^る安芸の宮島の周囲^{しゅうい}

には所々に小祠^{しょうし}がある。厳島神社の末社で、

い^いわゆる^{えい}日^ひ七恵比須^{えびす}である。その御祭神は

少童命^{しょうどうのみこと}と筒男命^{つつのさるのみこと}とであり、交互に祀^{まつ}ってある

第560図⁵⁶⁰ 厳島^{いづくしま}（宮島^{みやじま}）の七浦^{しちのうら}参照

という。〔伊都岐島^{いづき}〕厳島神社社務所、一

頁。〔宮島^{みやじま}〕広島県宮島町、五^ご二頁参照

・つまり、

〔恵比須神^{えびすのかみ}〕は、海神^{うみのかみ}（少童命^{しょうどうのみこと}）と住吉神^{すみよしかみ}

（筒男命^{つつのさるのみこと}）とである

と考えられている

*

和訓栞 2373 243^p

5,787^p

紀上87^p 243^p 5,782^p 243^p 百科 ③-560^p

曰 ^{えひす} 恵比須神 ^{えひす} は、別名 ^{えひす} 曰 夷三郎 ^{えひす} とも称 ^{えひす} 之

れる。一 広辞苑 ^{えひす} 恵比須 ^{えひす} 夷三郎 ^{えひす} 参照

綿津見三神も、住吉三神も、共に三神から

成 ^{えひす} っ ^{えひす} ているところから、曰 恵比須神 ^{えひす} のこと

を曰 夷三郎 ^{えひす} ともい ^{えひす} うのであ ^{えひす} ろうか。

● ^{えひす} とも ^{えひす} 通常、神代紀 (第五段本文) に

伊奘諾尊・伊奘冉尊の二神は、天照大神

月読尊の次に蛭兒 (三歳まで足が立たず、棄

てたという) を生み、その次に素戔鳴尊を生

んだ ^{えひす} 。

とあるところから、一 恵比須 ^{えひす} を蛭兒 ^{えひす} と考え

三番目に生まれたので、曰 夷三郎 ^{えひす} というよう

になったの ^{えひす} であ ^{えひす} ろうと解 ^{えひす} されて ^{えひす} いる。(「和

訓栞」。「広辞苑」へ夷三郎 ^{えひす} 参照)

● ^{えひす} かし、恵比須 (蛭兒) が次男と ^{えひす} して生 ^{えひす} ま

れたのであれば、曰 夷三郎 ^{えひす} でなく、曰 夷二

郎 ^{えひす} と称 ^{えひす} すべきであ ^{えひす} ろう。

米

H9.815(金)
H6.65(日)田
→

5.788^P-1/3

⑤5785^P
太伯の後

ともあれ、朝鮮半島から渡来した^{ミコト}綿津見
三神・住吉三神は、^{ミコト}夷とも^{ミコト}恵比
須とも呼ばれ、さうにまた、^{ミコト}蛭見のこ
とも解されるようになつたのであう。
■それでは、^{ミコト}恵比須神は、どうしたわけ
で一般庶民に広く親しまれることになつたの
だろうか。
●先に述べたが、^{ミコト}太伯の後と自稱す
古代の中国人たちは、東方の国を^{ミコト}夷の国
(異民族の国)と見ていたといふ。
■^{ミコト}なかから、朝鮮半島からこの日本列島
へ渡来した一般大衆は、^{ミコト}縄文人の子系
達や、^{ミコト}当初の弥生人の子系達とは、
へ朝鮮半島こそ、祖先の地であり、故郷の
国である。や扶余等の地域
と認識していったように起るといふ。(第一回参照)
朝鮮半島からやつてきてこの東海の島に住
みついた者達の子孫は、代々、長年月にわた
つて^{ミコト}竪穴式の住生活を踏襲したようである。
「^{ミコト}竪穴式住居は、縄文・弥生・古墳時代か
らさらに室町時代に至るまで作られた」

外ハ ④945^{2/2}
④949^{1/2} ④948^{2/2}末^{2/2} 5,788^{2/3}

次頁
から

というのである。(「広辞苑」へ「竪穴」参照)
朝鮮半島からの渡来人達は、
ゆたつて、祖先の地の文化をはるかな子々孫
々へ継承し続けたに相違ない。
・そこで「恵比須神」は、一般人の間で
最も親しみのもてる神として、もてはやされ、
厚く熱狂的に信仰されたのであろう、と推察
される。
①なお、あえて述べると、恵比須神が庶民の
間で広く親しまれるようになった平安時代に
は、すでに、
ハ日綿津見三神におよび日住吉三神は、
そもそも近畿地方の祖先と敵対していた日
子違ひが崇拝していた神であつた、
という発端が、すっかり忘れ去られてしま
つてゐた。
（「新編 日本書紀」の項参照）
（「新編 日本書紀」の項参照）

段代又3
945-3/2 949-1/2

5,788-3/3

前頁
トル

② いや、近畿地方に居住していた当初の弥生
人の子孫たちは、箕子達の祭器であった銅鐸
を受け継いで、絢爛たる銅鐸文化へと発
展させていった、と解される。(既述)
近畿地方在住の当初の弥生人の子孫達は、
箕子たちとの経緯の在てを知っていたにもか
かわらず、――大らかな心をもつて箕
子達の文化を受け入れ、銅鐸のみならず、
住吉三神(恵比須神)をも海和感なく崇
拝したとも考えられよう。

なおよ
もつとも、神功皇后征韓の時、住吉三神が
威霊を現わされたというのだから――
綿津見三神は、新羅からの
渡来人である。天日輝が祭っていた神だっ
たろうかとも思われる。(第十二章へ住吉三
神・綿津見三神の項において既述)
とある。詳細については分らない。

*

住吉大社 132'

住吉大社 211'
禰宜 1721

住吉大社 1837'
禰宜 881

酒でなく、
5,789-
西宮神社 西井氏 H98.17 田 Tel
S-fil 5789P
西宮は宮北の西で有名

243'
白科 ③-560

破顔一笑 (笑) 1721

■ 恵比須神は、海上・漁業・商業などの守護
神とされ、風折鳥帽子をかぶり、鯛を釣り上
げ、破顔一笑している姿に描かれる。(広辞苑)
■ 七福神中、最も庶民的な恵比須神は、「工
ハッさん」ともいわれ、関西では特に商売繁
昌の神さまとして親しまれている。
■ 毎年一月十日の「十日戎」の時、阪神では
西宮の戎さん山・日宮の戎さん山に商売
人などが群参して大いに賑い
商売繁昌、維持って来い
商売繁昌を願うなら、笹を持参しなさい。
縁起物の飾りを取り付けてあげますよ。
（「西宮神社」禰宜西井氏談）
という活気のあるかけ声が飛び交う。(写真掲載 826 参照)
■ ところが実は、住吉大社にも「エバ
ッさん」があつた。住吉大社の境内、本殿に
向かつて反橋の右手奥に日市戎社山があり、そ
の歴史は古いという。（「住吉大社」住吉大
社宮司 西本泰、学生社、二〇頁、二一一頁参照）
■ 住吉大社の神事について、鎌倉時代文永年

5,789P-2/2



写真図版 826 今宮戎神社の福娘
『西宮神社・今宮戎神社』神社紀行(50) 学習研究社 2003年11月30日発行 24頁参照

中の人、津守棟国（第四十七代神主国平の六男）が著述した「諸神事次第記」には、一月十日頃に「広田御狩」が行なわれるとして、九日の夜「江比須社御前」において酒肴が出て、巫女舞があり、十日酉刻「御狩神事」のあることが記されている。

「御狩神事」は、巫女が男形をして弓矢を取り、「狩場の躰」をなすのである。

しかし中世以後、「恵比須社」は断絶して「住吉松葉大記」が著わされた元禄頃には、位置さえ判然としないようになった。

「御狩神事」の形は多少のこされ、神楽所で行なわれていたようである。

こゝをなせ「広田御狩」とよぶのは、きりないか、「住吉大社神代記」に「住吉大神と広田大神と交親を成したまふ故、御風俗の和歌ありて灼然なり。」墨江に伊賀太浮べて渡りませ住吉がせこ是、即ち広田社の御祭の時の神宴歌なりとあって、「住吉大社」と、兵庫県武庫郡（大阪）北岸の「広田社」（祭神、天照大神。別殿、住吉三所大神）との関係がきわめて密接

領つ 1059P

住吉大社 212P

5,791P

断絶

5790P

③-560P

49.8.17

日本通志 334P

えびすくう 西宮神社に於て

地名 1189P

夷宮 日本通志 334P

二一二頁参照)

であつたこともうかがゆせる。
■なお、恵比須信仰の大きな本拠の一つとなつた西宮神社(夷宮)は、もと広田神社の末社にすぎなかつたが、社の神人百太夫のいひすかきひすなわち人形芝居の源流をなした者達の活躍の故であらうか、十三と十四世紀頃、市場の守護神として、商人達の信仰を集めたようである。
■西宮神社の祭神については古来諸説あるが社伝としては、蛭子大神を主神としている。
■(「世界大百科事典」平凡社「夷」)。日本社幸大観」名著刊行会「西宮神社(夷宮)」参照)。
■一方、住吉大社の市戎社は、先に述べたように中世の頃から断絶してゐたが、明治以後、復興し、現在は神館前に市戎社、大國社と並んで奉斎し、地元商店街の人等を中心に毎年一月十日大祭を行なつてゐる。
また、市戎といへば、わが国商業のはいめともいえる市戎がたつたのは神功皇后が三韓の貢物を領した時に始まるといふ。住吉大社に、宝之市神事があることは、という(「住吉大社」西本泰、学生社、

5,792P

H1.10.22(日)⑤
→

魏志倭人伝 49P
巻 16 年 未
HLV

トル

■ ^なま ^おお ^き魏志倭人伝 ^にに、

「国々市有り。有無を交易し、大倭を以て

之を監せしむし

と記されてあり。三世紀初頭頃すでに、大倭

の役人が監視するほどの市が存在していたよ

うである。

■ ^{やまとのくに}大倭国 ^{やまとのくに}(邪馬台国) は、三十余国を統轄し

こ小らの国々の市場を厳重な統制下において

いたのであろう。

米